



Title	医学教育を支えた模型たち
Author(s)	持田, 誠
Description	総合博物館へ行こう. 第14回.
Citation	きぼうの虹, 336, 7-7
Issue Date	2011-10-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47236
Type	article
File Information	mochida kibou336.pdf



総合博物館へ 行こう 第14回

医学教育を支えた模型たち

総合博物館
資料部研究員

持田 誠



写真1 医学部から移管されたロウ製皮膚病型模型「ムラージュ」。3階で展示されている。

ムラージュの部屋

化石や鉱物の並ぶ総合博物館の三階に、一見して雰囲気の異なる小さな一室がある。医学教育用に患者部を精巧に再現した模型「ムラージュ」の部屋である。まるで本物の人体の一部を切り取ったような数々の模型に(写真2)、怖くなくて飛び出してしまおう人もいるが、これはかつて、北大の医学教育を支えてきた、れっきとした教材なのである。

ムラージュとは

ムラージュ (Moulage) とは「型取り・成形」を意味するフランス語で、「ロウ製皮膚病型模型」と呼ばれる。十七世紀頃にフランスで製造が始まったとされる。カラー



写真2 まるで両手を切り取ってしまっただけに見えるムラージュ。

写真の無かった時代、皮膚病の病徴部位を正確に記録・伝達する事を目的に開発されたロウ製着色模型ムラージュは、医学教育の重要な教材となった。製作はまず型取りから。患者の罹患部に石膏を当て型を取り、パラフィンを混ぜたロウを流し込んで形状を写しとる。いわゆる患部の複製である。これに精密な彩色を施す。

石膏を固め、そこにロウを流し

込む訳だから、作る方も大変だが患者もまた大変な作業である。ムラージュ草創期のフランス人医師ジュール・バレット (Julius Baratta 1824-1923) は、型取りの最中、少しでも患者の負担を和らげようと、作業中にピアノを演奏したり、物語をするなどの配慮をしたと伝えられている。まさに医師(技師)と患者の共同作業があつて、初めて完成される模型と言えるだろう。

我が国では東京帝国大学医学部の初代皮膚科教授、土肥慶蔵(1866-1937)が、ドイツ留学時にその技法を習得し、一八九八年に日本へ持ち帰った。その後、土肥から伝授された技術を基にして国内生産が始まり、二十世紀初頭には全国の大学で医学教育の教材に用いられた。

北大の医学教育と

ムラージュの意義

北大総合博物館に展示されているムラージュは、大正時代から昭和三十年代にかけて、主に芸術家、南條義雄の手によって製作されたものである。実際に北海道大学医学部皮膚科で、永年に渡って教材として用いられてきた。その数約三百点が残されており、二〇〇六年に皮膚科から総合博物館へ



写真3 皮膚病罹患部の緻密な再現は、医学模型としての完成度の高さと共に、一種の芸術として評価される場合もある。

移管された。

これがロウ細工だとは思えない精巧な人体の一部(写真3)。そこに表された数々の皮膚病の患部は、確かに目を背けたくなくなるような生々しさがある。しかし、展示室の冒頭にも記されているとおり、皮膚病は実際に存在する病気であり、いつ誰が罹患するかもしれない、そして今日も苦しんでいる人たちが世界中に存在する「現実」なのである。この小さな部屋に再現された数々のムラージュは、皮膚病の治療や根絶に奮闘してきた医学関係者の歴史を証しているものであり、フィルムの発達してはなかつた時代の医学教育の証人でもあるのだ。

収蔵庫に眠る人体模型

総合博物館にはもうひとつの医学模型が収蔵されている。それは古い人体模型である。かつては一階の廊下などに展示されていたが、現在は収蔵庫に納められていて見ることは出来ない。

このうち一体の人体模型については、製造年代や製造元がはっきりしていない(写真4)。ただ、臓器などの取り出し方法や、素材が紙である点など、形態や製法に特徴がある。

現在、東京大学、金沢大学、九州大学および福岡市立郷土歴史博物館に、キュンストレーキと呼ばれる紙製人体模型が保存されている。いずれも幕末から明治初期の品と考えられているが、北大の人体模型はそこまで古いものではない。かと言って、それほど新しいものでも無い。ではいつ頃、誰が作ったものだろうか？総合博物館に眠る人体模型の素性が、ひょっとしたら明らかになる日が来るかもしれない。



写真4 収蔵庫に保管されている人体模型のひとつ。銘板は無く、現在、表記や素材から資料情報の解明を進めている。